

お お ぞ ら

No. 177

聖隷福祉事業団への法人移管後は60号

社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2017年1月1日

重症心身障害と聴覚

横地 健治

有意な言語理解のない重症心身障害児(者)では、人の声はどう聞こえているかを正しく知らなければ、その人に良い生活を送ってもらうことはできません。しかし、この理解は難しい課題であり、本通信でもたびたび取り上げています。今回も聞こえの世界を考えてみます。

ヒトが物を見るときは、身体と頭を動かして、物が視野の中心にくるようにして見ます。遮蔽物があったら見えません。これに対し、音はどこからでも届くものです。命を脅かす危険の認知、他者への意思伝達など、聴覚は生物にとつてより根源的な機能と考えられます。そのため、聴覚はヒトの機能として早く発達します。

子宮内の胎児の聴覚器官は人の声を聞くことができます。すでに発達しています。そして、出生間近の胎児・新生児は母の声を聞き分けている証拠があります。胎児が聴覚的学習をしているという事です。さらに、日本の乳児は、日本人が苦手とする「マ」と「ン」の音の聞き分けができています。

この研究があります。つまり、生まれてから半年あたりまでの乳児は、母国語以外のどんな発話音でも区別することができるが、1歳ぐらいで、養育環境で聞く発話音以外の弁別ができなくなるとされています。このことから、ヒトはまずどの言語にも対応できるように大量の聴覚受容機構を作り、その後、養育環境で聞く発話音以外のものは捨て去り、母国語に即した聴覚受容機構を進化させていくと考えられています。この捨て去る現象は「刈り込み」と呼ばれて、聴覚以外にも普遍的にみられるものです。

その後、1歳頃になって、初めて言葉を発します。これは、それまでに行っていた膨大な脳内作業がやっと表に現れたものです。まず、聞こえてくる音の全体から、特定の音を抜き出し、その音のつながりを単語として認識することをやっているはずで、そして、日々経験のなかで、単語と意味との対応を推論します。その対応は記憶され、その後の場面で修正されていきます。そして、修正不要になっ

た時点で、単語と意味との対応に決着がつかず、これをもちって単語を習得したことになります。つまり、他者の発する単語を聞けば、他者の意図することがわかります。また、他者に向かってその単語の音を発すれば、他者に自分の意図を伝えることができます。ただし、単語と意味との対応は絶対的なものではなく、生活経験のなかで微調整されていくものです。

こうした言語習得過程で注目すべきは、乳児自身が、単語の抜き出しと意味の解明を行っていることです。他者、主に母親は、この解明のための材料である聴覚経験をたくさん与えますが、解明する能力を賦与することはできません。これは、乳児自身が極めて高度な解析能力を持っていることを意味します。乳児がやっているこの作業を健康成人がやろうとしてもできないものではないと私は思います。乳児にこれができるのは、以下のような仕組みがあるからだと考えます。ヒトの発する音声パターンと意味づけには決まったルールがあり、ヒトはそれを読み解く遺伝的資質を持って生まれてきています。また、ヒトが発達期に、何に

対して脳内作業を集中するか

は、その時期によって違っている。乳児期は聴覚情報処理に集中する時期である。その後、脳はその主力を他の領域に移していく。そのため、成人は乳児期の高度な聴覚処理能力を失っている。

それでは、重症心身障害となる障害を負い、有意な言語理解ができない人には、他人が発した言葉はどう聞こえているのでしょうか。以上のことからすれば、こうした人たちは、発話音からの単語の抜き出し、単語の意味づけを健康1歳児と同等のレベルまでに到達させることができなかつたということになります。そうすれば、この到達度には様々な段階があるはずで、健康者にとっては意味を持たない擬態語のような音が、何かしらの意味を持つかもしれない。健康者には想像できない発話音と意味との対応があることを認めねばならないと思います。

聴覚で問題となることは、聞こえてくる全体から必要な発話音に気づく能力です(この能力を表す適当な日本語はなく、英語では awareness (アウェアネス) と言います)。雑踏のなかで自分に声をかけられた時、ヒトはすぐその声に注意を集中します。これが

は、その時期によって違っている。乳児期は聴覚情報処理に集中する時期である。その後、脳はその主力を他の領域に移していく。そのため、成人は乳児期の高度な聴覚処理能力を失っている。